1番

秋の田の かりほの庵の
苫をあらみ
わが衣手は 露にぬれつつ

天智天皇

2番

春すぎて 夏来にけらし
白妙の
衣ほすてふ 天の香具山

持統天皇

3番

あしびきの 山鳥の尾の
しだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝む

柿本人麻呂

4番

田子の浦に
うち出でて見れば 白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ

山部赤人

5番

奥山に 紅葉踏みわけ
鳴く鹿の
声きく時ぞ 秋は悲しき

猿丸大夫

6番

かささぎの 渡せる橋に
おく霜の
白きを見れば
夜ぞふけにける

中納言家持

7番

天の原 ふりさけ見れば
春日なる
三笠の山に 出でし月かも

安倍仲麿

8番

わが庵は 都のたつみ
しかぞすむ
世をうぢ山と
人はいふなり

喜撰法師

9番

花の色は うつりにけりな
いたづらに
わが身世にふる
ながめせしまに

小野小町

10番

これやこの 行くも帰るも
別れては
知るも知らぬも 逢坂の関

蝉丸

11番

わたの原 八十島かけて
漕ぎ出でぬと
人には告げよ あまの釣舟

参議篁

12番

天つ風 雲の通ひ路
吹きとぢよ
をとめの姿
しばしとどめむ

僧正遍昭

13番

筑波嶺の 峰より落つる
みなの川
恋ぞつもりて
淵となりぬる

陽成院

14番

陸奥の しのぶもぢずり
誰ゆゑに
乱れそめにし
われならなくに

河原左大臣

15番

君がため 春の野に出でて
若菜つむ
わが衣手に 雪は降りつつ

光孝天皇

16番

立ち別れ いなばの山の
峰に生ふる
まつとし聞かば
今帰り来む

中納言行平

17番

ちはやぶる 神代もきかず
竜田川
からくれなゐに
水くくるとは

在原業平朝臣

18番

住の江の 岸に寄る波
よるさへや
夢の通ひ路 人目よくらむ

藤原敏行朝臣

19番

難波潟 短き芦の
ふしの間も
逢はでこの世を
過ぐしてよとや

伊勢

20番

わびぬれば 今はた同じ
難波なる
みをつくしても
逢はむとぞ思ふ

元良親王

21番

今来むと いひしばかりに
長月の
有明の月を
待ち出でつるかな

素性法師

22番

吹くからに 秋の草木の
しをるれば
むべ山風を 嵐といふらむ

文屋康秀

23番

月見れば 千々にものこそ
悲しけれ
わが身一つの
秋にはあらねど

大江千里

24番

このたびは
幣も取りあへず 手向山
紅葉の錦 神のまにまに

菅家

25番

名にし負はば 逢坂山の
さねかづら
人に知られで
くるよしもがな

三条右大臣

26番

小倉山 峰の紅葉葉
心あらば
今ひとたびの
みゆき待たなむ

貞信公

27番

みかの原 わきて流るる
いづみ川
いつ見きとてか
恋しかるらむ

中納言兼輔

28番

山里は 冬ぞさびしさ
まさりける
人目も草も
かれぬと思へば

源宗于朝臣

29番

心あてに 折らばや折らむ
初霜の
置きまどはせる 白菊の花

凡河内躬恒

30番

有明の つれなく見えし
別れより
暁ばかり 憂きものはなし

壬生忠岑

31番

朝ぼらけ 有明の月と
見るまでに
吉野の里に 降れる白雪

坂上是則

32番

山川に 風のかけたる
しがらみは
流れもあへぬ
紅葉なりけり

春道列樹

33番

ひさかたの 光のどけき
春の日に
しづ心なく 花の散るらむ

紀友則

34番

誰をかも 知る人にせむ
高砂の
松も昔の 友ならなくに

藤原興風

35番

人はいさ 心も知らず
ふるさとは
花ぞ昔の 香ににほひける

紀貫之

36番

夏の夜は まだ宵ながら
明けぬるを
雲のいづこに 月宿るらむ

清原深養父

37番

白露に 風の吹きしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞ散りける

文屋朝康

38番

忘らるる 身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな

右近

39番

浅茅生の 小野の篠原
しのぶれど
あまりてなどか
人の恋しき

参議等

40番

しのぶれど
色に出でにけり わが恋は
ものや思ふと
人の問ふまで

平兼盛

41番

恋すてふ わが名はまだき
立ちにけり
人知れずこそ
思ひそめしか

壬生忠見

42番

契りきな かたみに袖を
しぼりつつ
末の松山 波越さじとは

清原元輔

43番

逢ひ見ての のちの心に
くらぶれば
昔はものを 思はざりけり

権中納言敦忠

44番

逢ふことの
絶えてしなくは
なかなかに
人をも身をも
恨みざらまし

中納言朝忠

45番

あはれとも いふべき人は
思ほえで
身のいたづらに
なりぬべきかな

謙徳公

46番

由良の門を 渡る舟人
かぢを絶え
ゆくへも知らぬ
恋の道かな

曾禰好忠

47番

八重むぐら しげれる宿の
さびしきに
人こそ見えね
秋は来にけり

恵慶法師

48番

風をいたみ 岩うつ波の
おのれのみ
くだけてものを
思ふころかな

源重之

49番

御垣守 衛士のたく火の
夜は燃え
昼は消えつつ
ものをこそ思へ

大中臣能宣朝臣

50番

君がため 惜しからざりし
命さへ
長くもがなと
思ひけるかな

藤原義孝

51番

かくとだに
えやはいぶきの さしも草
さしも知らじな
燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣

52番

明けぬれば
暮るるものとは
知りながら
なほ恨めしき
朝ぼらけかな

藤原道信朝臣

53番

嘆きつつ ひとり寝る夜の
明くる間は
いかに久しき
ものとかは知る

右大将道綱母

54番

忘れじの 行末までは
かたければ
今日を限りの 命ともがな

儀同三司母

55番

滝の音は 絶えて久しく
なりぬれど
名こそ流れて
なほ聞こえけれ

大納言公任

56番

あらざらむ
この世のほかの 思ひ出に
今ひとたびの
逢ふこともがな

和泉式部

57番

めぐりあひて
見しやそれとも
分かぬ間に
雲隠れにし 夜半の月かな

紫式部

58番

有馬山 猪名の笹原
風吹けば
いでそよ人を
忘れやはする

大弐三位

59番

やすらはで
寝なましものを
さ夜ふけて
かたぶくまでの
月を見しかな

赤染衛門

60番

大江山 いく野の道の
遠ければ
まだふみもみず 天の橋立

小式部内侍

61番

いにしへの 奈良の都の
八重桜
けふ九重に
にほひぬるかな

伊勢大輔

62番

夜をこめて 鳥のそらねは
はかるとも
よに逢坂の 関はゆるさじ

清少納言

63番

今はただ 思ひ絶えなむ
とばかりを
人づてならで
言ふよしもがな

左京大夫道雅

64番

朝ぼらけ 宇治の川霧
たえだえに
あらはれわたる
瀬々の網代木

権中納言定頼

65番

恨みわび ほさぬ袖だに
あるものを
恋に朽ちなむ
名こそ惜しけれ

相模

66番

もろともに あはれと思へ
山桜
花よりほかに
知る人もなし

大僧正行尊

67番

春の夜の 夢ばかりなる
手枕に
かひなく立たむ
名こそ惜しけれ

周防内侍

68番

心にも あらでうき世に
ながらへば
恋しかるべき
夜半の月かな

三条院

69番

嵐吹く 三室の山の
もみぢ葉は
竜田の川の 錦なりけり

能因法師

70番

さびしさに
宿を立ち出でて
ながむれば
いづくも同じ 秋の夕暮れ

良暹法師

71番

夕されば 門田の稲葉
おとづれて
芦のまろやに 秋風ぞ吹く

大納言経信

72番

音にきく たかしの浜の
あだ波は
かけじや袖の
ぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

73番

高砂の 尾の上の桜
咲きにけり
外山の霞
立たずもあらなむ

権中納言匡房

74番

憂かりける 人を初瀬の
山おろしよ
はげしかれとは
祈らぬものを

源俊頼朝臣

75番

契りおきし させもが露を
命にて
あはれ今年の
秋もいぬめり

藤原基俊

76番

わたの原
漕ぎ出でて見れば 久方の
雲居にまがふ 沖つ白波

法性寺入道前関白太政大臣

77番

瀬を早み 岩にせかるる
滝川の
われても末に
逢はむとぞ思ふ

崇徳院

78番

淡路島 かよふ千鳥の
鳴く声に
幾夜寝覚めぬ 須磨の関守

源兼昌

79番

秋風に たなびく雲の
絶え間より
もれ出づる月の
影のさやけさ

左京大夫顕輔

80番

長からむ 心も知らず
黒髪の
乱れて今朝は
ものをこそ思へ

待賢門院堀河

81番

ほととぎす 鳴きつる方を
ながむれば
ただ有明の 月ぞ残れる

後徳大寺左大臣

82番

思ひわび さても命は
あるものを
憂きにたへぬは
涙なりけり

道因法師

83番

世の中よ 道こそなけれ
思ひ入る
山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

84番

ながらへば
またこのごろや
しのばれむ
憂しと見し世ぞ
今は恋しき

藤原清輔朝臣

85番

夜もすがら
もの思ふころは
明けやらで
閨のひまさへ
つれなかりけり

俊恵法師

86番

嘆けとて 月やはものを
思はする
かこち顔なる わが涙かな

西行法師

87番

村雨の 露もまだひぬ
まきの葉に
霧立ちのぼる 秋の夕暮れ

寂蓮法師

88番

難波江の 芦のかりねの
ひとよゆゑ
みをつくしてや
恋ひわたるべき

皇嘉門院別当

89番

玉の緒よ 絶えなば絶えね
ながらへば
忍ぶることの
弱りもぞする

式子内親王

90番

見せばやな 雄島のあまの
袖だにも
濡れにぞ濡れし
色は変わらず

殷富門院大輔

91番

きりぎりす 鳴くや霜夜の
さむしろに
衣かたしき
ひとりかも寝む

後京極摂政前太政大臣

92番

わが袖は 潮干に見えぬ
沖の石の
人こそ知らね
乾く間もなし

二条院讃岐

93番

世の中は 常にもがもな
渚こぐ
あまの小舟の
綱手かなしも

鎌倉右大臣

94番

み吉野の 山の秋風
さ夜ふけて
ふるさと寒く 衣打つなり

参議雅経

95番

おほけなく うき世の民に
おほふかな
わがたつそまに 墨染の袖

前大僧正慈円

96番

花さそふ 嵐の庭の
雪ならで
ふりゆくものは
わが身なりけり

入道前太政大臣

97番

来ぬ人を まつほの浦の
夕なぎに
焼くや藻塩の
身もこがれつつ

権中納言定家

98番

風そよぐ ならの小川の
夕暮れは
みそぎぞ夏の
しるしなりける

従二位家隆

99番

人もをし 人も恨めし
あぢきなく
世を思ふゆゑに
もの思ふ身は

後鳥羽院

100番

百敷や 古き軒端の
しのぶにも
なほあまりある
昔なりけり

順徳院